

氏名	鈴木 美佐 (すずき みさ)	
学位の種類	博士(看護学)	
学位授与番号	甲 第19号	
学位授与年月日	令和2年3月4日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
学位論文題名	食物アレルギーのある子どもの対処過程に基づいた心理教育支援ガイドの開発に関する研究 (Based on the Coping Process of Children with Food Allergies Study on Development of Psychoeducational Support Guide)	
論文審査委員	(主) 教授	真継 和子
	教授	泊 祐子
	准教授	草野 恵美子

学位論文内容の要旨

《緒言》

食物アレルギー(Food Allergies:以下FA)の多くは乳幼児期に発症し、その有症率は近年増加傾向にある。学童期までに寛解に至るアレルギーもある一方で、症状の改善が得られず思春期・成人期に移行するもの、学童期以降に新たに発症するものなど、成長に伴い症状を変化させながら長期的な経過を辿るケースも増えている。

慢性疾患であるFAと共に育っていく子どもが、肯定的な自己概念を形成し、対処行動としての主体的な療養行動に取り組めるようになるなど、健やかな成長・発達を保障されるためには、FA児の病気認知の特性や子ども特有の対処過程を理解したうえで、養育者や、FA児に関わる専門職が、FA児の育ちを支える継続的な支援を進めることが必要である。そこで本研究では、FA児の発達段階や子どものFAへの対処過程をふまえた心理教育支援ガイドの作成を開発することとした。

《目的》

FAをもつ子どもの肯定的な自己概念の形成や主体的な療養行動の獲得に向けた日常生活における支援の視点を検討し、FA児の育ちを支えることを目的とした心理教育支援ガイドの作成を目的として、研究の第一部では、FAを含む慢性疾患をもつ思春期以前の子どもの病気認知の定義と特徴を明らかにする。

その結果を踏まえ、第二部では幼少期にFAを発症した子どもの対処過程を明らかにする。

第一部と第二部の研究成果をふまえ、第三部ではFA児が、肯定的な自己概念を形成することや自身の病気への主体的な療養行動に発達段階に応じて取り組めるようになることを目指した支援の視点を示す「親と、子どもに関わる専門職のための食物アレルギーの子どもの心理教育支援ガイド」(以下、支援ガイド)案を作成し、その内容の適切性について評価する。

《研究方法》

第一部では、Rodgersの概念分析手法を用い「慢性疾患をもつ子どもの病気認知」について国内外39件の文献を対象に概念分析を行った。

第二部では、11～15歳のFA児24人を研究対象者として半構造化インタビューを実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析した。

第三部では、第一部と第二部で明らかになったFA児の病気認知および対処過程の特性、必要な支援に関する示唆をもとに、FA児の養育者や、支援に携わる医療・保育・教育専門職が利用することのできる支援ガイドの構成要素・構造を検討した。それらをふまえて支援ガイド案を作成し、FA児看護の専門的知識と実践経験をもつ看護師2名と、FA児を養育している母親2名を対象としたフォーカスグループインタビューの結果を分析して支援ガイド案の適切性を評価した。

《結果及び結論》

第一部では、「慢性疾患をもつ子どもの病気認知」の属性として4つのカテゴリ、先行要件として4つのカテゴリ、帰結として3つのカテゴリを抽出した。「慢性疾患をもつ子どもの病気認知」について「疾患に伴う症状の変化を身体感覚として知覚し、病気に伴う制限・制約そのものを包含した体験を病気としてとらえながら、病気に伴う不確かであいまいな情報を意味づけ解釈すること」と定義した。慢性疾患をもつ子どもの病気認知の特性として、発達段階による影響を受けること、慢性的な経過の中で動的な変化を伴いながら次の発達課題につながっていることが示唆された。

第二部では、幼少期にFAを発症した子どもの対処過程として、11のカテゴリ【食物アレルギーは他人事】【他者との違いから“私のアレルギー”に気づく】【教わった知識と身体センサーで“私のアレルギー”への対処の仕方がわかる】【漠然としたアレルギーへの恐怖】【恐怖の対象であるアレルギーを排除する】【自分では取り扱うことのできないアレルギーへの恐怖】【サポートを得て自分にとっての安心・安全を追求する】【試行錯誤しながらアレルギーに挑戦する】【アレルギーの脅威が最少化出来る感覚】【アレルギーにとらわれすぎずにうまく生活するためのスキルを身につける】【アレルギーによる制約へのコントロール感覚】が生成された。FA児の対処過程は、発達特性の影響を受けながら、FAを脅威として認知する段階から、他者からのサポートを受けて安心を得たうえで、FAを対処可能な対象であると捉えなおし、生活の中で自分なりの挑戦を進めていく過程であった。

第三部では、第一部・第二部の結果を踏まえ作成した「親と、子どもに関わる専門職のための食物アレルギーの子どもの心理教育支援ガイド

ド」案の内容の適切性について分析した結果、内容の適切な点として【FA 児の成長・発達を支える支援の視点と内容は適切で有用】との結果を得た。また修正および今後の検討項目として【養育者にわかりやすい内容と表現への修正が必要】【子どもの成功体験を強化するための支援の視点の協調とその具体例の追加】【保育・教育現場で活用できる具体的支援方法の追加】【アレルギー症状の重症度別の対応の検討が必要】との結果を得た。

今後の課題として、意見を受けて修正した支援ガイドを、様々な発達段階にある FA 児の支援場面において利用し、支援ガイドの臨床応用可能性を評価すること、支援ガイドの活用と評価を繰り返し、内容の洗練化をはかること、支援ガイドの頒布方法・活用方法を検討することが必要である。

論文審査結果の要旨

本研究は、慢性疾患である食物アレルギー (Food Allergies: 以下 FA) がそれを有する子どもたちの健全な心身の成長・発達に影響することに鑑みて、子どもの発達段階をふまえた支援の必要性から取り組んだものである。その目的は、FA を有する子どもの成長・発達を保障しつつ、主体的な療養行動に取り組むための心理教育支援ガイドの開発であり、3 部で構成されている。

第 1 部は、国内外 39 文献から慢性疾患をもつ子どもの病気認知の概念分析を行い、「病気に伴う症状の変化を身体感覚として知覚し、病気に伴う制限・制約そのものを包含した体験を病気としてとらえながら、病気に伴う不確かであいまいな情報を意味づけ解釈すること」と定義した。

第 2 部では、幼少期に FA を発症した子どもの対処過程を明らかにし、主体的な療養行動の獲得にむけた看護支援を検討した。11 歳から 15 歳までの子ども 24 名に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、【食物アレルギーは他人事】【他者との違いから“私のアレルギー”に気づく】【他者との違いから“私のアレルギー”への対処の仕方がわかる】【漠然としたアレルゲンへの恐怖】【恐怖の対象であるアレルゲンを排除する】【自分では取り扱うことのできないアレルゲンの恐怖】【サポートを得て自分にとっての安心・安全を追求する】【試行錯誤しながらアレルゲンに挑戦する】【アレルギーにとらわれずにうまく生活するためのスキルを身につける】【アレルギーの脅威が最小化できる感覚】【アレルギーによる制約へのコントロール感覚】の 11 カテゴリを生成し、FA の認知と対処過程の分析をもとに、医療と生活モデル両側面からの支援の必要性を提示した。

第 3 部では、FA を有する子どもの対処過程に基づいた心理教育支援ガイドを作成し、FA 児の母親と看護師を対象にフォーカスグループインタビューを実施し、その内容の適切性について評価した。本研究の新規性は、FA の当事者である子どもの視点を取り入れた点、子どもが成長段階においてどのように対応しどう変化するかについて発達の視点から読み解いた点、発達段階に応じた心理教育支援ガイドの作成にある。今後、臨床応用可能性の検討が期待され、FA を有する子どもの健やかな成長と看護の発展に大きく寄与するものである。

以上により、本論文は本学大学院学則第 11 条第 2 項に定めるところの博士 (看護学) の学位授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

Open Journal of Health, 12, 38-62. 2020.